平成 3年10月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 Tel.0428-23-6859)

青梅町の伝説（その1）

どの地に行っても、必ず伝説のいくつかはあるものです。その中には、いくぶん史実にもとずいているらしいものもあれば、まったく荒唐無稽なものもあります。私達の町にもいくつかの伝説が伝わっています。そこで、その中から旧青梅町に伝わるものをいくつか紹介しましょう。

1. 将門誓いの梅

金剛寺の「将門誓いの梅」に関わる伝説は、この地の伝説の白眉といえましょう。

承平年間（今からおよそ一千年前）、かの武将・平将門が武運を祈ってさした梅の一枝が実を結び、その梅の実が秋になっても熟すことなく残っていることから、「青梅」という地名が生まれたというものです。江戸末期の「新編武蔵風土記稿」にも紹介されています。

本当に平将門がこの地に来たかどうか、知る由もありませんが、ここから奥多摩地方にかけて、平将門に関する伝説はいくつもあります。

2. 裏宿七兵衛

明治から昭和初期にかけて活躍した大衆小説家・中里介山の代表作「大菩薩峠」に登場する『裏宿七兵衛』に関わる伝説も、なかなか知名度が高いものです。『裏宿七兵衛』はめっぽう足が早い義賊で、一夜に四十里五十里を普通に歩いて、笠を胸にあてて歩いても下に落ちなかったなどといわれています。その屋敷跡は「七兵衛公園」として裏宿に残され、また、七兵衛の畑跡と伝えられる青梅中央図書館裏の一角には、「七兵衛地蔵尊」が祀られています。またそのお墓は千ヶ瀬の宗建寺にあります。足腰の病に効くということで、数年前には元横綱の北の湖が現役時代に参拝に訪れたそうです。面白いことに、「谷合氏見聞録」には、裏宿の七兵衛という盗賊がつかまり、処罰されたという記録があって、これが裏宿七兵衛の実像ではないかといわれています。ただしこの七兵衛は18世紀の人ですし、(伝説上の七兵衛は19世紀)、義賊どもなかったようです。

最近、柚木の小川秋子さんはこの「裏宿七兵衛」をモデルにして「ハラペコ伊助とおおどろぼう」という童話を発行しました。

3. 休哲さま

森下の山根に「休哲さま」という小祠があります。昔からこの「休哲さま」に穴があいた石を供えると耳の病に効くという言い伝えがあって、かなりの信仰があったようです。今はどなたか貴徳なお方が祠の脇に、石を入れておく箱を作ってくれたので、容易に石を供えられるようになっています。この「休哲さま」は、実は江戸中期（18世紀）に実在した仁医「足立休哲」もことで、この小祠は、この仁医を慕う人々をまつて建てたものだそうです。

(文責 野村慎三郎)